

たと見られている。次二男を島外分家させる一方、絶家の場合には島外から分家を呼び戻す形で、厳格に戸数が守られて来た。網漁業からの必要性もさることながら島の面積が小さく限られていることが基本にある。1949年に初めて定期船が通うようになって以来次第に便利になり、島をあげて観光にとりこんでいる姿勢は現在の全戸民宿という形でもよく判る。漁船も40隻だから漁業も農業も、そして食堂・民宿もすべてにわたって兼業していることになる。初島にわたる人の数は10月だと1万人を越え伊豆大島への渡島者とそう変わらない数字であり、充分観光化の実績もあがっている。こうした質的な変化を経ても、戸数固定が今のところ守られているのは、注目すべきことに違いない。

さて初島の語源は、はしま（^{はし}端の島）にあるようだが、静岡県唯一の離島であるというのも面白い。熱海市に属していることもあって水道や電気など公共投資はかなり徹底している。1967年以来、電気は熱海から海底ケーブルによって送電されている。それ以前は1953年まではランプ、その後は自家発電であった。1980年、水道も網代から海底送水管が敷設され、上水が直接供給されている。それ以前は浅井戸水源の簡易水道で脱塩施設を必要としていた。今では水も電気も本土から送られているのだから、単純に離島のイメージを当てはめる訳にもいかない。ともあれ初島に一寸タッチしただけでも地理の課題が続々掘り出せた気がしている。（1987年2月1日）

世界図考

井内 昇

近年国際化をめぐる論議がかまびすしい。個人レベルで国際化にどう対応するかは人さまざまであろうが、要は世界をどう認識するかに盡きるであろう。だが、その認識のあり方には決定的なものがあるわけではない。しかし、いやしくも地理学を専攻する立場からすれば、地表の諸事象の空間的相互関係を正確に理解していること、具体的にいえば地図の上で正確に表現された世界像を持つことがその基本となるだろう。

近代測量術の発達によって地表の諸事象の位置関係は正確に知られるようになり、人工衛星の出現で今や誤差を無視できるまでになった。しかし、近代測量術がとり入れられる以前の世界図は、情報の不足や表現技法の幼稚さもあって凡そ正確というには程遠いものであった。だが、このような当時の稚拙な地図（というよりは絵図）も、当時の人々が頭の中にえがいた世界のイメージをうかがえるという点で別の興味の対象となりうる。数多の古地図の中でも、この点でとくに価値のあるのはいうまでもなくプトレマイオスの世界図で、イスラム世界を経て近世のヨーロッパ世界まで、1000年以上にわたって生きのびたこの地図が、当時の人々の世界認識にどう影響を及ぼしたかは、それ自体が地理学発達史の重要なテーマである。61年度に担当した「地理学概論」をプトレマイオスからスタートしたのもそのためであったが、この時受講学生（地理科4年生）にも世界図を画いてもらうことにした。また、比較のため

にはほぼ同数のT大学文学部生にも同じ条件で画いてもらった。試みに当っての私の事前の予測は、(1)地理科生の世界図は一般学生の世界図に比べ平均水準は高いであろう。(2)一般学生の世界図の出来ばえには専攻学科の違いが反映するであろう。といったものであった。画いてもらうための具体的条件は、赤道、東西経度180度線、及びグリニッジ本初子午線を入れた長方形の白図を与え、その上に諸大陸と主要な島を記入し、さらに世界の主要都市、地名、山脈、島嶼名を与えその位置を記入させる、というものである。

両者合わせて約40枚の世界図からは色々の発見があったが、幾つかを紹介してみよう。①地理科生は位置関係や形状に関してはT大生よりも正確にえがいているが、誤りも決して少なくない。②きわめて正確な図を画いた数人はいずれもT大生で、専攻はマチマチであった。③プトレマイオスの時代を思わせる不正確な世界図も数枚あったが、これらもT大生の作品であった。

この世界図作成に関して私が事前に興味を持った点は、①先進・途上国で正確さに差が出るか？②赤道との（南北方向の）位置関係の正確さ、③北半球諸都市の緯度上の関係、④有名観光地、国際政治上重要な都市、地名の正確さ、等であったが、②と③はわりに正確であったのに対し、アフリカ、中近東に関して誤りが多く、とくに当時連日新聞を賑わしていたリビアの位置

が東欧であったり、ホンコン、マニラ、上海等、日本に近い都市の位置が意外に不正確なことは驚きであった。また、両グループ共、西インド諸島を南太平洋やインド洋に記入した例が少なくなかったが、同諸島が現在のアングロ、ラテン両アリカの大きな違いを生み出したヨーロッパの新大陸侵略の原点であることを考えれば、それはやはりカリブ寄り大西洋以外ではありえ

ないのは常識で、単に地名の記憶の次元では片づけられぬ気がする。

地理学の奥義をきわめるのも大事だが、世界の何処で、どのような人々が、どのような生き方をしているのか、に思いをはせながら、世界地図を前に世界のしくみを考えることも有意義であろう。

アメリカ南部旅行

内藤 博夫

今から25年ほど前のことになるが、私がまだ学部学生の頃、アメリカ人牧師のT. Z.ランキン氏が私の家を訪ねてきた。教会をたてたいので、私の家の裏手の高台にある60坪足らずの土地を貸してほしいというのである。かつては自給用の野菜を作っていたところであるが、戦後祖父が亡くなってからは未利用地になっていた。私の家ではその土地をランキン氏に貸すことにした。ランキン氏の日本語は流暢といえるものではなかったが、牧師らしい誠実な態度に対応に出た母も好感をもったようである。以来ランキン家と私の家とは家族ぐるみでおつき合いをするようになった。教会といっても固定した建物ではなく、移動可能なトレーラー・ハウスだった。ランキン氏はこの「簡易宣教所」を使って5、6年間布教活動を行なった。ランキン氏は帰国後も教会の仕事でしばしば訪日しているが、そのときは私の家にも1泊していくのが慣例になっている。

1983年6月のある日、帰宅してみても驚いた。見知らぬアメリカ人夫婦が食卓についているではないか。この夫婦はG.パークス夫妻といい、ランキン氏の友人だった。ランキン氏が仕事で日本を経由して中国へ行くのに便乗して日本にやってきたのである。パークス夫妻の到着については事前に連絡がなかったので私の家族も最初はとまどったようであるが、その日はランキン氏は別の知人宅に、パークス夫妻は私の家に泊まることになった。以来パークス家ともクリスマスにはカードを交換する間柄となった。ランキン氏とパークス氏はともにニューオーリンズの北東約100kmのところにあるミシシッピ州のピキューン(Picayuneと綴る)という人口8000の町に住んでいる。両氏をお宅に、できれば家族同伴で訪ねることは永年の夢であったが、1985年10月から在外研究でアメリカに滞在することになり、86年

の3月には家内が2週間の予定で渡米することが可能になったのでさっそく両氏と連絡を取り、おじゃまさせてもらうことになった。こうして5泊6日(ランキン氏宅に2泊、パークス氏宅に3泊)の南部旅行が実現した。

ランキン、パークス両氏の家はいずれも林と畑が交錯するピキューンの町の郊外にあった。両家とも子供さんたちはすでに独立して生計を営んでいるので老夫婦だけの生活である。私たちの訪問に対しては両家とも誠意をもってもてなしてくれただけでなく、自家用車を駆って各地を案内してくれた。おかげで私たちは短期間のうちにルイジアナ、ミシシッピ、アラバマの3州に足跡を残すことができた。南部に来てまず感じたことは南部の精神的風土とでもいうべきものだった。ニューオーリンズ空港からランキン氏のお宅へ向う途中で立寄ったみやげ物店には、南北戦争のときの南軍の旗をあしらったさまざまなワッペンが売られていたし、パークス夫妻とともに行ったアラバマ州モービル市郊外にあるベリングラス庭園(コカ・コーラ社を創設した故W. D.ベニングラス氏の豪邸とその庭園で1956年以来一般に公開されている)では南軍の総司令官リー將軍の大きな肖像画が部屋の壁に掲げられてあった。北部に破れたとはいえ南部の誇りは脈々と受けつがれているのである。

南部は長くアメリカの中の後進地域にとどまっていた。そのため人口の移動は少く、地付きの人が多いということだった。ランキン夫妻に誘われて近くの小さな教会の集会に出席したところ、そこでは牧師の説教は15分ほどで終わり、讃美歌の合唱と悩みごとの告白が時間をかけて行われていた。教会(新教バプテスト派)は地付きの人を中心とした地域住民の中に深く根を下